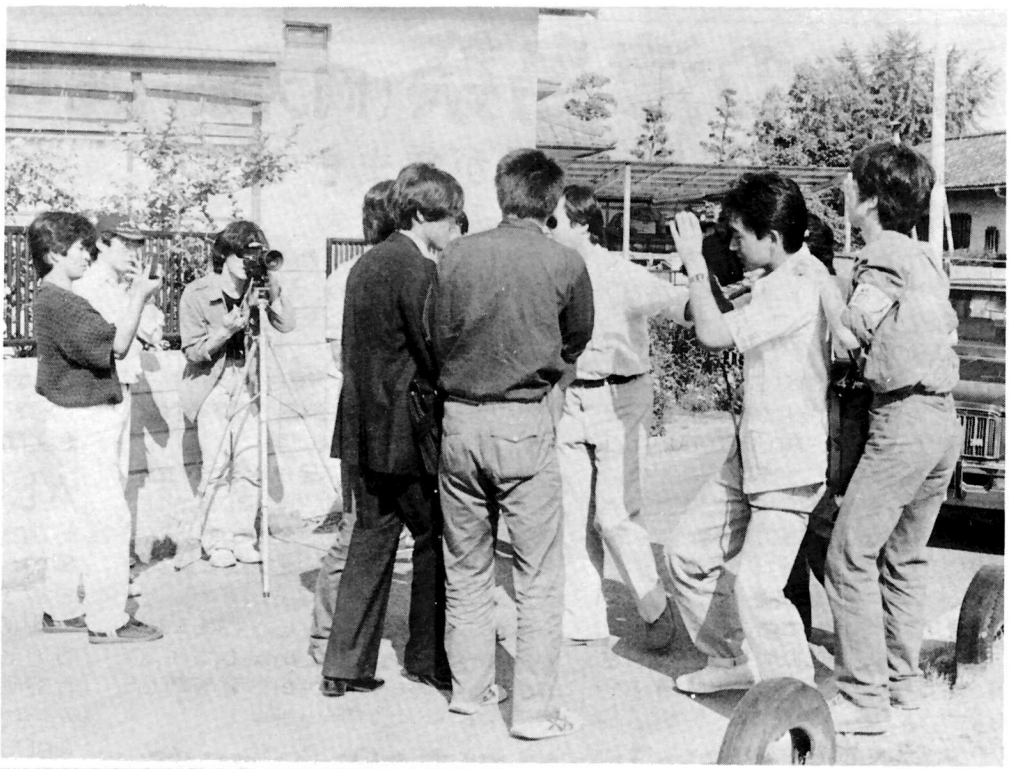


またまた自主製作映画

4月号に引き続き、今回も、自主製作映画を紹介いたします。以下は、映画研究部部員のつくった「What are the girls made of?」と「CUT」の2作品です。



現在、製作中の作品は、10分程度の短編でタイトルが、「What are the girls made of?」というやつです。マザーグースの詩の中に、「What are little girls made of?」というのがあり、これは、「女の子って、何でできてる?」と訳そうですが、そこからヒントを得て、シナリオを書いたのです。ストーリーは、とあるカップルがデートした1日を描いたもので、2人が待ち合わせたところから話が始まり、途中、映画の撮影現場にぞくぞくと、それにまきこまれて云々、といったふうです。全体的に、のっぺりとした、起伏の少ない構成で、細かくカットをつなぎ、アップを多用して、表情の変化や目の動きとか、微妙なしぐさをとらえてみたわけです。

男から見た女の子というのは、不可解で、不安定で、時々意外な発想をしたりして、あたりまえかもしれないけど、どこか男には決してないものを感ぜさせると思うことがしばしばあって、そういう感じを、男の感覚で、女の子の魅力として、好意的にとらえてゆくと、つらかったのですが、ひとりで撮影がすんでみると、はたして思い通りの絵ができたかどうか、やや不安なきにしろあらずという感じです。

デート中という設定なので、すべてロケで大学構内、街中、河原、倉敷、津川と、あちこちに出かけてゆきました。天候のほうも、日頃の行いがたまたま、なかなか恵まれず

3月中にはクランクアップの予定が、大幅に遅れて、とうとう5月までかかってしまい、スタッフ&キャストのみなさんには、ずいぶん迷惑をかけてしまいました。さらに、私自身この作品が監督として第2作にあたり、映画作りのノウハウみたいなものも十分な知識・経験があるとはいえず、現場で迷ってしまったりすることもあり、その雰囲気が画面にチラチラみえたりして、経験不足はいかんとおしかたく自信がぐらつきかけたことばかりありました。

何はとあれ、一応、撮影のほうはクランクアップして、あとは編集、音入れと一連の作業を残すのみとなりました。10分程度の映画に、70分ものフィルムをまわしてしまおうという超不経済的な撮影をしてしまいましたが、完成のメドがたつて、ホッとしている今日この頃です。

なお、これはまだ未定ながら、この作品と、あと同じ頃に完成予定の自主製作映画二本を、学館で借りて上映しようという案がありますので、そうならたら観に来て下さい。6月中になると思います。できたら、感想なんぞ聞かせてもらえたら幸いです。ヨロシク。(高田哲也氏談)



「映画をつくりたい」という願望が、かなり以前からあり、ようやく実現したのが現在製作中の「CUT(仮題)」です。この作品は筒井泰隆の原作をよとに、かなり原作に近い形で映画化したものです。ただ、原作に近いといっても、それはストーリー的なもので、雰囲気はかなり違っています。だから「筒井」というのを意識しすぎて「アレ?」ということになるかもしれません。

さて、撮影の方ですが、3月中旬に第1稿のシナリオを書き上げ、2回ほどそれを数人で手直ししました。その結果、当初の15分程度の映画にするつもりが25~30分ぐらいになり悲鳴をあげたりするのです。そして3月下旬にクランクインしたのですが、なにぶん自分で撮影するのは初めてなので要領が悪く、なかなかうまく進みませんでした。また、物語の90%が屋内が舞台であるために、照明にたいへんな苦労をさせられてしまいました。撮るときには、なかなかいいな、と思うのですが、実際に映像にして観ると全然違ってたりして、今までのところ思うことの半分もできていないような気がします。

ストーリーはいたって簡単で、脱獄囚に妻を人質とされたサラリーマンが、逆に今度はその脱獄囚の家へ行き、その妻を人質にして

てこえるのです。物語は、このサラリーマンが狂人と化していく様を描いていますが、その過程での彼の心理がうまく表現できているか心配です。

心配といえば、スタッフ&キャストは全て大学生であるため、サラリーマンとか刑事とかはそれらしくなくて、やはり大学生だけと限界があるなと感じました。

現任、全体の約80%ほどの撮影が終わりましたが、リメイクも含めて、まだしばらくかかりそうです。それで5月中には完成の予定で、6月中に学館で上映しようかと考えています。3週間ほど、クランクアップのつもりが今まで伸びたことを考えると、5月中完成という予定もなんとも危うい気がします。そこは有能な(?)スタッフと表意者な(?)役者さんがそろっていることだし、なんとかなるだろうとタカをくくっています。

私の頭の中にはすでに次の作品の計画があり、今作っている映画を土台として、更にもっといいものを作ろうと考えています。だから、上映会ではたくさんの人に観てもらい、いろいろな意見を聞きたいな、と思っている次第です。あと少し、カンバンベ。(談：村上)



「神々の深き欲望」(69)今村昌平監督

「Primitive Humanity」
—映研新歓上映会—
「透明度の高い血まみれの残酷士」
今村昌平は『神々の深き欲望』について語ったとき、自らの出発点とここに見出すと言っている。今村が奄美の離島に舞台をかりて書いて探り出した、本人の原型とは、まさにこの言葉で表現されているだろう。

「血まみれ」で「残酷」であるに拘らず、「透明度の高い」ものであるが、極論を許されれば原初の人間である。今村昌平が『にっぽん昆虫記』(63)『人間蒸発』(67)『神々の深き欲望』(69)から近年の『復讐するは我にあり』(79)『ええじゃないか』(81)そして公開中の『楳嶺節考』に至るまで追いついていくのは、

原始的な方向へ潮人人間のエネルギーな姿であり、生き方であると思われる。『神々の』はその姿勢が最も顕著に表れた作品であり、文化人類学的な見地から創られたドラマであるということに我々の興味をひく。今村昌平の一貫したリアリズムの手法はどの作品においても人間の生き様を冷徹に見据えるに適して、それは最新作『楳嶺節考』でも見事な河を流しているが、過去にこの深沢七郎の原作を得て映画化した木下恵介は、今村のリアリズムに対して持論を言っている。今回の上映会は、今村昌平の話題作『楳嶺節考』を念頭において企画したもので、木下恵介の『楳嶺節考』(58)もそうした意味で観て欲しい。今から四世紀前につくられた『楳嶺節考』で

'83 映研新歓上映会 "Primitive Humanity"

木下恵介は、歌舞伎的に様式化し、舞台劇手方で描くという方法を探った。それは年老いた親を山に捨てる、姥捨山の伝説を淡々と描いた原作の持つ無気味さ、残酷さに堪えるためであらう。今村はそれを真正面から捉え、しかしその残酷さを持った物語を淡々と人間を一個の自然物として描き、風物の絵を積み重ねることによって逃げようのない感動を突きつけてくる。それは正に「透明度の高い」証なのである。ラストの雪のシーンはそのイメージと重なるが、様式化という手法から、セットやカラーを駆使した木下の雪とは、捉え方が大きく違ってしまうのである。

しかし、今村の『楳嶺節考』にしても、それまでの粘りこい、演出自体エネルギーな描き方に比して、淡々とした描写である。それは原作の持つ、この静かな恐ろしさから来るものであるだろうが、『神々の深き欲望』で頂点に達したとさえ言われるリアリズムが、更に洗練され、演出家の年齢と共に詩の有するエネルギーへと昇華していったと見るべきであるかも知れない。

この文章が読まれる頃には『楳嶺節考』の上映期間は終わっているかも知れないが、是非観ておいて下さることを願う。

木下恵介は、50年代から活躍していた監督であり、『二十四の瞳』(54)筆で知られている。近年においては『激動殺人・息子よ』(79)『父よ母よ』(80)筆で復活、今年も新作が待機している。

とりあえずは、この二人の先匠の作品を御

覧になり、二人が共に映画化した『楳嶺節考』という作品を通じて、Primitive Humanityというものに思いを馳せて欲しい。

今村昌平は、昭和四十二年にあるインタビューに答えてこう言っている。

——自分をたしかめるために、人間を描くのだ——

人間に限りない興味を抱くことは、即ち自分も確め、見つめるということであるのかも知れない。そういう、こじつけめいた説明をすれば、少しは「新歓」の意味がでるだろうか。(談：森直紀)

Schedule
'83 映画研究部新歓上映会
日時 / 6月11日(土)
場所 / 学館ホール

上映作品
・『楳嶺節考』 1958年 松竹
(1時間58分) ベストワン第一位
原作: 深沢七郎
脚本・監督: 木下恵介
主演: 田中絹代、高橋貞二
・『神々の深き欲望』 1968年 今村昌平
(2時間50分)
脚本: 長谷部慶次、今村昌平
監督: 今村昌平
主演: 三国連太郎、河原崎長一郎